

### くまのやまとたいしゃ　ゆいしょ 熊野那智大社の由緒

熊野那智大社社伝によると、「神武天皇が熊野瀬から那智の海岸にしきうら」に上陸されたとき、那智の山に先が裸くのをみて、この大瀧をさりて當られ、神として祀られ、その守護のもとに八咫鳥の導きによって無事大和へ入られた」と記されております。このように熊野那智大社の祀源は、那智大瀧を神としてあがめることにあるのですが、その社殿

お滝本から現在の社地に移したのは仁徳天皇5年(317)と伝えられています。時代を経てその後、平家物語にも出でまいりますように、平重盛が造営奉行となって装いを改め、やがて織田信長の焼打ちに遭ったのを豊臣秀吉が再興し徳川時代に入つてからは、将軍吉宗公の尽力で草創(1716~)の大改修が行なわれたとされ、最近では昭和10年に大改修が行なわれています。



春になると社前の桜垂桜が花を添えますが、この桜は最初は、後白河法皇のお手植されたものといわれ室町時代の図鑑にも描かれています。また、この桜の側には、神武天皇が大和に入られる際、道筋内をした八咫鳥が、その往を終え、この石に姿を化したといえられる鳥石があります。なお、平重盛の手植えと伝えられる樹齢800年余の大楠などもあります。

社殿は六棟十三殿よりなり、それぞれの御殿は名称をもち神々を祀り熊野那智大社と称し、熊野権現、あるいは十二所権現と称し、お滝の神を含め十三所権現とよばれています。その由縁の神佛習合時代に神々と一緒に祀られていた本地仏の名もかかげられています。第一殿は須佐宮殿で大己貴命、第二殿は家津御子神、第三殿は熊野速玉神、第四殿は熊野夫須美玉神、第五殿は天照大神が祀られていますが、第六殿熊野夫須美玉神が当社の御主神で、むすびの神、万物の生成、育成、すなわち生産和合の守護神として多くの人々に崇拝されてまいりました。

II-7-④

### くまのやまとたいしゃ　ゆいしょ 熊野速玉大社の由緒

熊野速玉大社は、景行天皇五十八年に熊野三所権現隣瀬の元宮「神倉山」から、現社地に新たに宮殿を造って御遷宮したから、旧御座地の神倉神社に対して「新宮」と号し、御祭神は、熊野速玉男命・熊野夫須美玉命を主神に十二柱の神々を祀りあげ、古来から新宮十二社大權現として朝野の崇敬を蒙めてきました。

特に孝謙天皇の御世、日本第一・大靈験所



の勅額を區り、熊野権現信仰は熊野比久や熊野比久尼によって、一躍国家挙げての信仰に発展していきました。

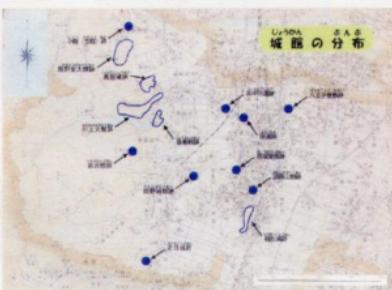
境内には、熊野権現の象徴たる樹齢約千年的「櫻」の大樹がそびえ、御神木として崇められ、また既代の朝廷から賜った1,200点にもおよぶ古神宝は、質と量ともに我が国屈指の社宝として恩く國宝の指定を受け、熊野神宝館にて展示しています。

II-7-⑤

### ちゅうせい　やまじろ 中世の山城

けわしい山の地形に築かれた戦いのための施設で、鎌倉時代末頃から戦国時代にかけて作られました。城主は日磯山里の館に住んでいて、戦いが始まるごとに山城にたてこもり戦いました。山城では、小さな平地を柵や空堀で囲んだり、山の斜面を段状にするなど、敵の攻撃を防ぐため山の地形を利用した工夫がほどこされました。

II-8-①



II-8-②